

第 32 期第 3 回仙台市図書館協議会会議録

- ◎ 会議の日時・場所 令和 7 年 8 月 5 日（火）10 時 00 分～11 時 50 分
仙台市役所本庁舎 8 階 第 5 委員会室
- ◎ 出席委員の氏名 木村ひろみ委員、児玉忠委員、小林直之委員、
齋藤千里委員、佐々木祐二委員、佐藤孝子委員、
佐藤幸雄委員、中川美佳委員、渡邊勝宏委員、
渡辺祥子委員、渡邊千恵子委員
- ◎ 事務局職員氏名 市民図書館長 湯村倫子、市民図書館副館長 伊勢貴
広瀬図書館長 佐藤雅智、宮城野図書館長 岩淵明広
榴岡図書館長 柴田雅子、若林図書館長 村上佳子
太白図書館長 横山弘達、泉図書館長 那須野昌之
市民図書館企画運営係長 菊池敦
市民図書館奉仕整理係長 吾妻由美
市民図書館奉仕整理係主査 浅野佑一

◎ 会議の概要

1 開 会

2 挨 拶

館長挨拶

会長挨拶

3 会議録署名委員指名

会長より木村ひろみ委員を指名。

4 協議事項

（１）令和 6 年度仙台市図書館事業報告書（案）について

（市民図書館副館長 説明）

資料に基づき説明

[委員からの質問・意見等]

- 議 長 令和 6 年度仙台市図書館事業報告書から、各館挙げて意欲的に事業に取り組んだことが分かったと思う。方向性ごとに令和 6 年度の事業活動に対してご意見を頂戴したい。まず、方向性 1 について質問や意見はあるか。
- 佐々木祐二委員 各館様々な事業をされているが、目についたのは榴岡図書館のブックトレードだ。時代に合わせた取組みだと思うが、実施状況や課題を教えてください。
- 榴岡図書館 昨年度は毎月第 3 水曜日に実施していた。多いときで 100 名前後の参加があり、老若男女問わず様々な世代の方に来ていただいた。本を寄付する事業だと思っている方が多

く、持ってきていただいた本と交換することで、新しい本との出会いを楽しむ事業だと説明する場面が多かった。平日の実施だと参加者が限られてしまうため今年度は毎月第1土曜日も実施しているが、これまでの第3水曜日の開催が浸透しており、第1土曜日の利用者が伸び悩んでいることが課題だ。今月は夏休み期間ということもあり小学生の利用が伸びているので、徐々に周知できればいいと考えている。

議 長 勤務先の大学の学生と榴岡図書館のブックトレードを視察し、7月12日に開催してみた。一般的にはブックトレードとは何かが分からないので、初回は認知していただくための活動だと感じている。本を持ってきて交換する方は少なかったが、活動の趣旨に賛同してくださる方と「こんな活動しているの、いいわね」「次回は本を持ってくるから、今度いつするの？」という会話を通しての交流があった。学校として実施するには、集めた本をどう管理するか、いつまで継続できるかが課題となるが、それでも本を交換するだけでなく、交流の場ができるので、とてもいい取り組みだと思う。

木村ひろみ委員 図書館に行かないとブックトレードの開催は分からないものか。ホームページや市政だよりに開催案内は掲載されているか。

榴 岡 図 書 館 市政だよりのほか、図書館のホームページやXにも毎月掲載している。出張ブックトレードという形で、昨年度は榴岡小学校のワイワイまつりや、地域の企業、保育園などを運営しているところにも出かけたこともあり、ロコミでも広がっている印象だ。

議 長 榴岡図書館は仙台市生涯学習支援センターの下階（4階）にあるが、ブックトレードは1階で実施しているので立ち寄りやすくいい。

佐藤幸雄委員 資料1の参考資料について、若林図書館が改修工事のため休館となり、令和6年度の貸出数などの数値は減少したとの説明があったが、前年からどれくらい減少したのか、具体的に記載されているとわかりやすい。リニューアル開館したのでおそらく利用者はいずれ戻ってくるということだろうが、休館していると事業を行ってもなかなか市民に届かないとか、これまで本に親しんでいたのに図書館を利用する期間が空くことによって本から離れてしまうこともあると思う。せっかく良い施策を展開しているのだから、次の広瀬図書館の改修工事の際は、例えば、移動図書館や電子図書館をうまく活用して、利用者を減らさないための対策はできないか。

館 長 昨年度の利用者数を見ると、若林図書館の休館中は太白図書館、宮城野図書館、市民図書館など他館の利用者数の増加がみられた。通常、若林図書館をご利用の方々が他館に移ったのではないかと推測しているが、全員が他館を利用できるわけではないので、利用者数の合計は令和5年度より少し減少した。若林図書館は他館を利用しやすい場所だったが、来年度工事予定の広瀬図書館は他館と離れているので、代替えとしてどの図書館を利用していただけるのかという心配がある。対策として、その間はサービスを提供できる窓口を設けたい。移動図書館や電子図書館でフォローできないかというアイデアをいただいたので、今後、図書館の改修工事による休館期間の利用を減らさないための方策について検討していきたい。

議 長 ほかに方向性1で何かあるか。なければ方向性2についていかがか。

中川美佳委員 こどもたちに向けた働きかけが、非常に多種多様、多彩ですばらしいと思う。私は中

学校の教員なので一番興味を持ったのは、8ページの【中高生の主体的なサポート】の部分で、図書館サポーターやYA図書委員会など中高生が主体的に図書館運営に参画できる企画の多さだ。どれくらいの人数で、どういうタイプの生徒の参加があるのか。

議 長 各館それぞれYA向けの事業を実施しているので、今の質問に対して、各館から説明をお願いします。

若林図書館長 休館前の昨年5月からYAサポーターとして「としょ部」を開始し、休館後再開して今年で2年目になる。だいたい毎回6、7人の参加があり、中学生よりも高校生が多く、本好きで真面目なタイプの生徒が多い。現在は自分たちで選んだお薦め本の案内作成やYAコーナーでの展示のほか、本へのフィルムコート装備や配架など、図書館の仕事の体験をしてもらっているが、これからは自分たちでやりたいことを企画していくということも考えていきたい。

榴岡図書館長 「Jr. サポーター」として、年間を通して自分が参加できるタイミングで活動してもらっている。若林図書館と同様に昨年度は10名弱の参加があり、継続的に参加する方もいる。中には教員を目指している高校生がいて、学校の探究活動の一環でワークショップを企画し、参加者を募って実施した。また、多様な学びを選択している中学生は、生涯学習支援センターによる専門学校を見学に行くイベントに参加し、その内容を新聞にまとめ、図書館の利用者に見てもらおうということも行った。参加したいタイミングで中高生がやりたいことを実現できるように、図書館ができる範囲で協力するスタンスで実施している。

議 長 中高生が主体的な取り組みをするための居場所や舞台になっているところがいい。

泉図書館長 泉図書館はのびすく泉中央が併設されている複合施設の中にある。当館では「YA図書委員会」として、昨年度は図書館員体験、ビブリオバトル、おはなし会リレーの運営などに携わってもらった。昨年度の参加者は十数名だったが、今年度の募集では18名の参加となっている。今年度も全4回の活動を予定しており、7月30・31日に図書館員体験を実施した。8月8日はビブリオバトル、秋にはおはなし会リレーに携わってもらう予定だ。のびすくと連携してビブリオバトルを実施しているが、のびすくにはYA世代が利用するフロアがあり、そこで利用者に声がけをして興味のある方にビブリオバトルに参加してもらっている。昨年度のYA図書委員会は、どちらかというとおとなしい子が多い印象だったが、今年は18名も参加しているので、これまでとタイプの違う子が加われば取り組み方や様子も変わってくると思うが、良いほうに変わればいいと思う。

議 長 市民図書館はどうか。

事務局 昨年度、全館事業として実施した児童文学作家石崎洋司氏講演会の運営実行委員会は、YA世代の人たち自身の手で自分たちYA世代に向けた講演会を図書館と協働してつくるといったものだった。石崎洋司氏ファンの中高生の申し込みが多数あり、読書会を行くと熱弁を振る中高生がたくさんいて、石崎洋司氏の作品に対する想いがあふれる会となった。講演会も運営実行委員会から中高生ならではのアイデアや意見を出してもらい、図書館側もバックアップして実施することができた。

- 議 長 以前から、若い世代の図書を通したコミュニティーができていけばいいという話をしていたが、それがだんだん実現してきている姿が見えてとてもうれしい。
- 渡辺祥子委員 仙台市でそのような大きなイベントをするときに、各館のYAの皆さんに声がけをするなど連携はあるのか。
- 事務局 昨年度は、児童文学者講演会が始まる前に、各図書館で活動しているYAの図書館サポーターの活動紹介の時間を設け、活動している中高生自身に各館での取組みについて話をしてもらった。
- 渡辺祥子委員 全体が見えて皆さんがつながれる、他の図書館にもこういう人たちがいるということを知る機会はとても大事なので、そういった時間が設けられたことはとてもよかった。
- 中川美佳委員 先ほど、どういうタイプの生徒が何人ぐらい参加しているかと質問した理由は、学校だと図書館に頻繁に通う子たちはおとなしい子が多い。それはコミュニケーションが弱いということではなく、誰かを巻き込まなくても自分が本と対話する中で十分に楽しめているので、誰かに発信するという方向性の子はあまりいないと思っていた。それが、わざわざ図書館へ足を運んでグループの中に入り企画するのは、一体どんな子たちなのか興味があったからだ。各館とも高校生が多いこと、将来を見据えている子も含めて集まっていることに驚いた。
- 本校の生徒がそのような活動に参加するとしたらどういう手法があるかと考えると、こどもたちは、時間がない、図書館が遠いという不利な条件が2つあるので、例えばオンライン会議（委員会）の実施はどうかと思っている。読書会のような意見交換もいいが、公共図書館でこういうことをやったら楽しいと思うとか、あるいは、学校の図書委員会でこういうことをやっているのだから公共図書館からこういう本を借りたらいいのではないかなど、そういった意見交流もできたらいいと思う。
- 本校の図書委員会では夏休みに入る前に、夜の実施ではないが部屋を真っ暗にして図書委員が怖い話をする「怪談ナイト」を行った。自分たちでやりたいと思う子たちはいるので、YA向け事業にオンラインで参加できるとしたら、参加したいと思う子たちはたくさんいると思うし、学校としても参加しやすい。出向かなくても参加できる企画も今後考えていただけたらありがたい。
- 佐々木祐二委員 9ページについて。小学校の1年生に図書館利用案内「としょかんへいこう！」を配布していただきありがたく思っている。これは小学1年生が読むというよりも、親が読んで親が図書館へ連れていくことになるだろうが、高学年向けに「高学年版としょかんへいこう！」のようなものがあると、自分たちで行動できる学年になったときに活用できるのではないかな。仙台市標準学力検査や仙台市生活・学習状況調査（小3から中3対象）や全国学力・学習状況調査（小6、中3対象）の結果を見ると、こどもたちは読書が大好きだけれども、学年が上がるにつれて公共図書館や学校図書館に足を運ぶ機会がどんどん減っていく。こどもたちは他にやることがあって忙しいということもあると思うが、高学年であれば高学年向けの案内を見て、興味のある子は自分で足を運ぶことができると思う。図書館だけをお願いするわけにはいけないので、小学校の学校図書館部会では、小学生の夏休み帳の1ページをいただき、図書館利用の紹介やお薦めの本、各

図書館の住所と電話番号を掲載している。せっかく 1 ページいただいているのに読み飛ばされているのか、なかなか効果がでないように思うので、効果がでるように図書館からのアプローチもぜひ要望したい。

佐藤孝子委員 先月、「にこにこ赤ちゃん・えほんのひろば」を見学した。栄養士による栄養食事相談やわらべうたのコーナーなど、本に関するブースだけでなくいろいろなブースがありとても勉強になった。また、乳幼児や小学生のきょうだいも一緒に参加していたのがとてもよかった。以前、私がブックスタートのオンライン研修会に参加した時の話になるが、福岡県筑後市では、ブックスタート時に 0 歳児の利用者カードを作成していた。その後の統計によると、小学生になったときの図書館利用率がとてもよいそうだ。0 歳のときにカードを作ったことで保護者の意識が向くのか、面白い結果だと思った。「にこにこ赤ちゃん・えほんのひろば」の会場に登録コーナーがあれば、0 歳から利用者カードが作成できることを知ってもらえる機会になる。すでに分かっている保護者の方もあると思うが、いい周知の場になる。こどもの名前で本を借りていくことで、歴史がつながっていくというのもいい。

齋藤千里委員 今の関連で、私も「にこにこ赤ちゃん・えほんのひろば」を見学したが、参加者の人数がわかれば教えてほしい。

事務局 この事業報告書は令和 6 年度の内容になるが、今年度も「にこにこ赤ちゃん・えほんのひろば」を実施した。本日、机上に配付した資料に今年度の開催報告があるので、ご覧いただきたい。各ブースともたくさんの方に参加していただいた。

齋藤千里委員 2 日目 (7/7) に見学に行ったが、たくさんの方が来場していた。手話のおはなし会があって読書バリアフリーが実践されていると感じた。こどもが大きくなるにつれて読書に触れる機会は少しずつ得られるとは思いますが、佐藤孝子委員のお話にもあったように、0 歳から利用できることをもっと啓発していくことが大切ではないか。まずは、保護者に知ってもらい意識付けをすることで、こどもたちが自分で本を選べる年齢になれば興味を持って図書館を利用することができるようになると思う。いろいろな場で全年齢に対して啓発していくことが大切だ。この方向性 2 は本当に大切にしてほしい。

議長 次に方向性 3 について、質問、意見はあるか。

中川美佳委員 電子図書館には期待をしているし、学校現場でも使いたいと思っている。コンテンツ数は増えているのに、ログイン数、貸出数、予約数が減っているのはなぜか。

館長 コンテンツの契約期限切れで入れ替わるものもあり、それほど数を増やせているわけではないので、あまりコンテンツに変化がないと感じてしまう方がいること、また、どこまでを電子図書館のデータと考えるかということがある。電子図書館ではたくさんの雑誌が閲覧できたり、障害のある方向けのコンテンツがあつたりと、いろいろなものをバナーの掲示なども行いながら入れ込んでいるが、学校での利用も含めた全ての統計として、全体で増えている・増えていないというところと少し違ってくる。狭い意味で、図書館が購入・契約している電子書籍で見ると伸び悩みはあるかもしれないが、電子図書館にはもっといろいろな可能性があり、電子的なデータで見られる全てのものを今後は電子図書館という名前で括っていくのはいかがでしょうかと考えている。

中川美佳委員　　そうすると、ここに表れている数字よりも利用はあって、数字に表れていない部分があるということか。

事務局　　まず、この数字は個人利用の数字であり、学校の利用は含まれていない。電子図書館を初めて使う方が多く、最初はチャレンジしてみるが挫折する方もいる。また、どうしても電子図書館の場合、契約上の課題がある。電子書籍というと1つのコンテンツに複数の方が同時に使えるイメージがあると思うが、契約上、1人が借りていたら他の方は借りることができない。たくさん借りられると思ったら、〇人待ちになっている資料もあって、思っていたのと違うと感じる方もいると思う。それから、先ほど館長が申し上げたように契約期間の問題がある。利用できる期間が2年で切れてしまい、そのコンテンツが使えなくなってしまう。その分、新しいものを契約するが、予算の制約があり一気に数を増やすことができない。数が増えていけば利用の広がりも出てくると思うが、このあたりが伸び悩んでいる原因と捉えている。

中川美佳委員　　学校の特別利用IDで借りている分が含まれていないことは分かった。生徒に登録を無理にさせられないという登録の問題と、読みたいものがあるかどうかという問題の2つが壁になっていて、本当はもっと使いたいと学校現場では思っていることを伝えたかった。

それから、方向性2に関わるが、学校に電子図書館の使い方の説明に来ていただいてありがたいと思っているが、先生たちではなく子どもたちに直接説明していただくことはできないか。大人向けだと、まず大人が勉強して、次のその大人が子どもたちに教える、そこのワンステップが意外と障害になることもある。全校生徒を対象にしなくてもいいので、1クラスに教えている様子をオンラインで全クラスに映す方法もあると思う。

事務局　　もっと使いたいというご意見はありがたい。現在、生徒数の10%のIDを配付していると思うが、要望があれば配付するID数を増やすことは可能だ。授業時間を使って研修会をするのは学校も難しいのではないかとと思っている。電子図書館を調べ学習に使っていただくのも有効だと思うので、まず先生方に使い方を理解していただくために、先生向けの研修会を行っている。その先に、例えば朝読書で便利な読み放題のコンテンツを子どもたちに使っていただくとか、そういったことにつなげてほしい。

中川美佳委員　　承知した。

副会長　　デジタルになった瞬間にライセンスの問題などいろいろなハードルが出てきて、お金の問題になるのは気になるところだが、今の話は図書館が電子図書館の使い方の動画教材を作って、各学校に配付すればいいことだと思う。そのときのIDの上限の問題があるかもしれないが、いずれにしても、学校とつながるときにデジタルはデジタルで解決できる道があると思う。

小林直之委員　　公共図書館の電子図書館サービスについては、図書館を擁護するわけではないが、まだ本格的に始まって10年も経っていないぐらいで、もし電子図書館サービスの利用者数が右肩上がりに増えている公共図書館があったら、多分視察が殺到する異例の状況ということになると思う。それから、紙の図書と電子図書の違いとして、紙の図書はイベ

ントや事業によっていろいろな見せ方をして、利用者を集めて利用を促していくことができるが、電子図書館は基本的にパソコンやスマートフォンの画面だけで見せて、そこから借りてもらうということになるので、その見せ方を工夫するのも相当難しいし、そこで差をつけていくのも難しい。ただ、電子図書館サービスの大きな特徴としては非来館型サービスであることが挙げられる。これは読書バリアフリーにもつながり、いずれ読み上げ機能が一般的になってくれば、強固なコンテンツになってくるはずだ。仙台市図書館が電子図書館サービスを割と早めに導入したということは、大きく評価したい。一般の方の利用者数が伸びないとしても、電子図書館サービスでこういったサービスが提供できるのかを考えると、以前、私は公共図書館の電子図書サービスは自治体のデータベースになっていくだろうという話をした。例えば、自治体で作成している様々な資料等を一つ一つ電子化していきデータベースにしていくことで、大きな1つのデータベースや大きなアーカイブになり、それを求める新たな利用者が出てくるので、そういう利用者を取り込んでいくのも有効だと思う。始まって10年経たないぐらいなので、利用者が伸びないことをあまり悲観的に捉えなくてもいいのではないかな。

中川美佳委員 せっかくの電子図書館がもったいないと思いお伝えした。
議 長 図書館へのアクセスがよくない地域に住んでいる方も多い。特にこどもは自分で移動するのは難しいので、まずは電子図書館を利用し、市内各地の図書館に行けるようになったらその図書館を利用するという接続が生まれるといい。

次に方向性4について。小林委員が話された行政資料の電子書籍化についての記載もある。方向性4について、質問、意見はあるか。

渡邊勝宏委員 16 ページの「市民の財産としての資料を計画的に収集」というところで、各館ごとに分野を決めて分担収集をしていることがわかった。これは会議冒頭の館長の挨拶にあった、市内の図書館がネットワークでつながり、全体として1つの図書館というイメージで取り組んでいるということの現れだと思う。ネットワークの中で、実際にどのように資料が動いているのか教えていただきたい。

館 長 分担収集は先ほどお話ししたせんだいライブラリーネットワーク整備計画により実現した。市内の図書館を1つの図書館として資料を共有し、所蔵している図書館から利用者の受け取り希望の図書館へ資料を配送している。毎日、朝から配送を開始し、市内7館のほかに宮城県図書館も含め、夕方までかけて全ての図書館を配送車が巡回しており、かなり大量に本が動いている状況だ。

渡邊勝宏委員 若林図書館が8か月、年間3分の2休館していたが、貸出冊数はその数とは比例しないというところにも、このような物流により資料提供が支えられ、サービスが維持されてきたことが分かる。宮城県図書館の場合は、市町村図書館との間で資料の配送があるが、週に1回ペースの巡回なので、仙台市図書館は市民サービスとして大変優れていると思う。物流のことは市民の方々には見えないがインフラとして重要なところなので、そのあたりを市民に周知すると、各館の特色も知ることができて、より資料が活用されるのではないかなと思う。

齋藤千里委員 17 ページの【地域人材の育成と活躍の場の提供、市民参加の促進】では、各種ボラ

ンティアの養成講座等が実施されており、ブックトークボランティア基礎講座を受講した方が、私が所属しているブックトークボランティア「ランプ」に入ってくることがある。そのほかにも読み聞かせやわらべうた、ストーリーテリングと様々な講座があり、それが無料で受講できて、このような勉強ができるというのは市民にとって有益なことだ。私も自分のスキルアップのために何年かごとに受講しているが、楽しみにしているので、ぜひこれからも継続して実施するようお願いしたい。

議長 講座受講者が増えていけば、こどもたちを支える大人が増えていくことになる。
齋藤千里委員 そういうこともあるし、自分のスキルアップにもつながっていく。
議長 方向性1から4まで意見を伺ったが、児玉副会長に全体を通した意見を願う。
副会長 ここで言うのがいいのか分からないが、20 ページの総括についてだが、現在の振興計画の4つの観点から重点事項を決めていたはずだ。その重点事項と令和6年度の単年度レベルの関係がどういう関係になっているのか、資料だけではよく分からなかった。これは単年度レベルでのご報告なので、重点事項と必ずしも結びつくものと結びつかないものがあるが、重点事項を意識した新規事業だったのか、重点事項を意識して継続してどういうことをしたのか、加えて、新規事業においても、単独館で行っているものと全館で行っているものがあるが、単独館での手応えがあれば、これを他館にどう広げていくのか、そういったことも書かれていると分かりやすい。

この後の中間見直しも、今度は複数年度での総括になっていくので、その際のこの重点の見直し、重点事項の点検、評価について、お話しいただけるとありがたい。最初の計画どおりにはいかない面が必ず出てくる。走りながら考える、途中で思いついたから取り入れるとか、やってみたらとてもよかったというように、当初の計画と実態は必ずずれるところが出てくるので、そういったあたりを丁寧に言語化していただくとわかりやすい。重点事項を守れというつもりは全くなく、時代とともに変化していくものが当然だと思うので、柔軟性を持った計画の見直しや単年度報告であればいい。

議長 事業報告書については、委員の皆さんの意見を取りまとめ、児玉副会長のご指摘も踏まえながら修正をお願いしたい。次回の協議会の前には公表させていただくことをご了解ください。取りまとめについては、事務局と私にご一任いただきたい。

(2) (仮称) 仙台市図書館振興計画 2022 (中間見直し版) (素案) について

(市民図書館副館長 説明)

資料に基づき説明

[委員からの質問・意見等]

議長 中間見直し版の素案について何か質問や意見はあるか。資料2の4ページの方向性と施策のところは、今までできていなかったところも含め、重点的に取り組んでいくために新たに盛り込んでいくことだと理解している。

小林直之委員 現振興計画を検討しているときから私は委員を務めており、長期間の計画であるがゆえに中間見直しを設けたらいいのではないかという議論もここでしたことを憶えている。少し背景をお話すると、おそらく新型コロナの流行が始まって間もなくの頃に現

振興計画の検討をしていて、あのような出来事が起きてしまうと当然利用者数は減少し、人を集めることができない状況となり、それまで図書館の事業としてやってきたことが大きく変わってしまうのではないかという思いがあった。そういうことを踏まえると、やはり長期の計画よりも中間に見直しを設けようという議論があったと記憶している。そのための議論が今このタイミングだと思う。過去の3年間を振り返り、社会がどのように変わったかを考えると、ここ3年間ぐらいの環境の変化としては、出版業界にいたので書店の減少というのは大きな出来事であると感じている。全国でみるとここ20年で半数ぐらいに減っているイメージで、年間だと600店ずつぐらい減っている。仙台市にはまだ大手の書店があるが、皆さんご承知のとおり昨年5月には金港堂が本店を閉め、一気にさみしくなった。私は職場から一番近い書店だったのでよく利用していたが、身近にあった書店がなくなると何が起こるか身をもって感じたのは、読書量が減ったということだ。何かのついでに書店に寄って本を買っていた行動がなくなったことによって、明らかに読書量が減ったと自覚している。これは今全国で起きていることだとしみじみ感じた。書店が減ることで、本と出会う場所がどんどん少なくなっている。県内でも書店がない自治体はたしか6つぐらいあると記憶している。仙台市は、しばらくはそういったことにはならないかもしれないが、図書館が本と出会う場になるという役割をこれから担っていくことになる。残念ながら書店はこれ以上日本には増えないと思う。現在、公共図書館は全国で約3,300館あり、図書館も今ある数を保っていくということが大事になってくるわけだが、本と出会う場所という役割がこれから大きくなっていくということを過去の3年間を振り返り、これからの3年間の中に一言でも盛り込む必要があると思う。本と出会う場所としての図書館、役割の変化というところをどこかに盛り込めればと思う。

- 議長 確かに本屋がなくなってしまう未来が来るのかもしれない。
- 小林直之委員 多分、一度も本屋さんに行かずに高校生になったり大学生になったりというケースはたくさんあると思う。
- 議長 中間見直し版の素案に盛り込んだ部分も含めて、こんなにたくさんのことをしなければいけないが、事務局としてはキャパシティ的には大丈夫か。
- 副会長 今、学校も同じことが起きていて、どれも大事なことで正論であるが、それをどんどん足し算していくと、一個一個は小さな仕事かもしれないが、それが束になってくるとどうしようもなくなる。管理職の先生たちは、求められるいろいろな教育を合わせ技でいけいかとか、あるいは足し算ばかりではなく、引き算も必要ではないかという思いがある。しかし、この文脈に働き方改革があったりするので、自分たちが言うべきことなのか分からなくなっている。そのあたりを少し念頭に置いて、たくさんやっているということを示すことがいいことばかりではないことを我々は気にしながら議論を聞かせていただいているということは申し上げておきたい。
- 館長 仕事上どうしてもやらなければいけないことを並べているのだが、3年でやり切れるとは考えていない。次の計画も見据えて、入口をつくり、整理していければと思っているので、皆さんのお考えをたくさん出していただきたい。

- 小林直之委員 これも現振興計画策定のときの議論で記憶しているが、現振興計画の7ページ「(5) 仙台市図書館振興計画 2022 策定に向けて」の、段落でいうと上から4つ目の「また」から始まる部分だが、ここの最後のところに、「本計画においては、数値目標を定め、取組みをさらに進めていくこととします」とある。たしか当時、事務局のほうから「数値目標を定め」という一文が出たときに、委員から、果たして図書館の事業として数値目標を定めることがふさわしいかどうか議論になった記憶がある。感染症の流行のような想定しないことが起きると数値がクリアできなくなる、あるいは先ほどの佐藤幸雄委員のお話にもあったが、図書館が休館してしまうと利用者数が減ってしまう、そういった理由で数値目標がクリアできないとなってしまうのはどうなのか。そもそも図書館と数値目標というのは親和性があるものなのかという議論があったと思う。そのこともたしか、中間見直しで検討し直しましょうということになっていた記憶がある。この「数値目標を定め」というところを取るかどうかは別にして、皆さんからご意見を伺いたい。
- 議長 数値目標は厳密に見ていかないということにしていた。
- 小林直之委員 そうだとすれば、例えば「数値目標を定め」の「定め」の部分はなくてもいいと思う。
- 議長 現に数値目標を定めるのはやめたはずなので、ここは修正したほうがいい。
- 副会長 量的なところばかりではなくて、やはり質的なところがこの事業ではとても大事だ。量と質のバランスがいいのはもちろんいいことだが、質を絶対譲れないものとして持つべきで、優先順位としてはそちらが優先だ。
- 議長 事務局、いかがか。
- 館長 「数値目標を設定」と各所に書いてあるが、そうではなくて、これを参考数字として見ていくということか。
- 小林直之委員 数値を例えばデータとして生かしとか、そのようなイメージだ。
- 副会長 エビデンスを求められるので数値は出さざるを得ないが、それに縛られないように、それだけが評価の優先順位にならないようにという、そういう議論だった記憶がある。
- 館長 検討させていただきたい。
- 議長 今回、素案についてご意見いただいた。次の協議会では反映されたものを説明いただいて、最終的には年明けに中間見直し版(案)として完成させたものを確認する流れになる。他にご意見あるか。なければ、これで進めていただくことでよろしいか。
- 各委員 異議なし。

5 その他

事務局から連絡

(事務局 説明)

参考資料に基づき説明

[委員からの質問・意見等]

- 議長 長 中高生読書盛り上げ隊については、応募が多数でうれしい。せっかくこのように関心が高かったので、活動の様子も広報していただきたい。また来年増えるかもしれないが、そのときは分科会のような形で分けることも視野に入りたい。せっかくここまで関

心を持ってもらったものは、きちんと市全体で共有できるようにするとよい。

次回の協議会について

(市民図書館副館長 説明)

[委員からの質問・意見等]

議 長 その他何かあるか。

佐藤孝子委員 9月9日にブックスタートの全国研修会が東北学院大学の土樋キャンパスで開催される。事前申込みが必要となるが、まだ締め切っていないようなので申込み可能かと思う。事例発表などがあるそうで、図書館が運営している事例だけでなく、保健福祉課などいろいろなところでの運営も考慮した内容と伺っている。私も勉強のため参加したいと思う。

各 委 員 特になし。

議 長 以上で議事を終了する。

7 閉 会